

生活に役立つメディア処理

——料理行動を科学する——

小特集編集にあたって

編集チームリーダー 佐野睦夫

料理に接する行動は生活の中で極めて重要であるにもかかわらず、情報学分野では、系統のかつ体系的に扱われてこなかった。料理を取り巻く情報は、五感を総動員したものであり、味やおいしさの伝達や表現は簡単ではない。また、人間は、レシピに書かれていない膨大な背景知識と経験を駆使して料理を作っている。近年、センサネットワークやウェアラブルコンピュータの発展により、料理に接する場面のログが取得できるようになりつつあり、情報学的観点から、「料理を科学する」ことが可能になってきた。料理メディアとは、料理行動を介した生活コミュニケーションメディアであり、本小特集は、「生活に役立つメディア処理」と題して、2006年11月に発足した料理メディア研究会（HCG 第三種研究会）で議論してきた内容やそれまでの研究をまとめたものである。

本小特集は、まず、第1章で、「料理メディア研究の展開」というテーマで、料理メディアの適用分野と今後の可能性についてまとめた。第2章から第4章では、料理行動のサイクルを「献立を決める→料理を作る→食べる」ととらえ、それぞれの立場からまとめて頂いた。

第2章の「献立を決める」というテーマでは、井手一郎氏に全体のまとめをお願いした。上田真由美氏、間瀬健二氏には、個人の嗜好と健康を考慮した料理支援システムの研究を、上田博唯氏、土屋誠司氏、小林亮博氏には、連想しりとり型対話システムによる献立決定支援の研究を、井手一郎氏には、料理番組映像要約による献立決定支援の研究をそれぞれ、御紹介頂いた。

第3章の「料理を作る」というテーマでは、山肩洋子氏、船富卓哉氏に調理支援／調理コミュニケーション支援の観点から、全体のまとめをお願いした。上田博唯氏、辻秀典氏には、調理行動モデルの記述の研究を、山肩洋子氏、船富卓哉氏、美濃導彦氏には、調理観測映像からの調理状況認識の研究を、中内靖氏には、環境知能化による調理行動認識の研究を、宮脇健三郎氏には、調理作業支援のためのインタラクションデザインの研究を、中村裕一氏には、仮想アシスタントによる料理映像取得支援の研究を、椎尾一郎氏には、調理を介したコミュニケーション支援の研究をそれぞれ、御解説頂いた。

第4章の「食べる」というテーマでは、宮脇健三郎氏、尾関基行氏に健康と楽しさの側面からテーマをとらえ、全体のまとめをお願いした。木村穰氏には、携帯電話を用いた食認知と遠隔食事指導の研究を、相澤清晴氏、北村圭吾氏、山崎俊彦氏には、画像処理を応用した食事ログの研究を、森麻紀氏には、拡張現実感による楽しい食卓の研究を、武川直樹氏には、食事中のコミュニケーション構造と遠隔共食システムの研究をそれぞれ、御紹介頂いた。

今回の小特集により、料理という身近な生活行動を情報学という切り口で科学できることを示したが、生活に本当に役立つ料理メディア研究としては、第一歩を踏み出したにすぎない。社会学・認知心理学・健康科学など異分野との連携が活発に行われ、本研究分野が更に発展することを期待する。

最後に、御多忙の中、研究内容を分かりやすく解説して頂いた執筆者の皆様、そして、この企画を進める上で御尽力頂いた小特集編集チーム及び学会事務局の皆様にご感謝の意を表したい。

小特集編集チーム	佐野 睦夫	井手 一郎	尾関 基行	船富 卓哉	宮脇健三郎
	山肩 洋子	荒川 賢一	生駒 洋子	苗村 昌秀	芳澤 伸一